

巻頭言：井口 廣氏さんを偲んで

長谷川 啓之
アジア近代化研究所・代表

わが研究所の創立時から副代表を務めていただいた井口廣氏（日本サン石油株式会社社長）が突如亡くなられて、早くも1年が経過しました。そこで、往時の井口氏を偲んで、いくつかの思い出を記し、彼のご霊前に一文をささげようと思います。

井口さんは私の大学院（通信制国際情報研究科・博士前期課程）での教え子でした。実は、授業を開始して暫く、彼が何をしているのか、うかつにもまったく知りませんでした。まあ原則として、私は学生とプライベートなかかわりは持たない主義なので、関心を持たなかったと言った方がいいでしょう。しかし、彼は学生と言っても、社会人であり、いわゆる20歳前後の学生とはわけが違います。社会人との会話からは多くを学ぶことができます。学生对教師をいう枠を超えた関係こそは社会人教育での醍醐味でもあるわけです。

しかし、いきなり学生とプライベートな付き合いをする契機はありませんでした。私の授業科目はアジア経済論研究ですから当然かもしれませんが、彼はときどきアジアに関する現実的な発言をするため、あるとき、彼にはそんなに現実的な意見を言うほどのアジア経験なり知識があるのか、と

ふと不思議に思いました。そこで、聞いてみると、自分はアジアの複数の国に会社を持っており、年に何度かはアジアに出かけ、従業員も雇っているというではありませんか。また、かなり豊富なビジネス経験を持っていることがわかり、驚いた次第です。彼は1970年代の韓国でビジネスをスタートさせた後、台湾、マレーシア、インドネシア、タイ、中国などでビジネスを開始したということでした。

しかも、さらに後に知ったのですが、彼の親会社はアメリカでは有名なSunoccoという石油会社だということであり、奥様も外国人ということでした。ですから、彼はいわばアジアとアメリカを飛び回る生活をしており、しかも学問にも異常なほどの関心を持っていました。彼はなんと学者を希望していたということを知りました。それで彼が、博士前期課程を卒業したとき、後期課程に進みたいと言った意味が分かりました。

いわば、私よりはるかに国際人の井口さんがタイのバンコクのホテルで急死するという事態を、彼の秘書の方からうかがったとき、驚くと同時に、まさに井口さんの死にふさわしいともいえるものだと感じた次

第です。

彼はアジアでのビジネス経験についていくつかの文章を書いております。それはすべてわが研究所の機関紙である *Newsletter* (および最近公開した『アジア・レポート』第2号に掲載) に載っており、すでにご存じの方も多いかと思います。それを読むと、彼が理論的な勉強をする以前から、現実を実に的確にとらえており、なるほどと感じるものが少なくありません。たとえば、彼はビジネスでの経験を通じて、韓国と台湾のビジネス文化の相違を明らかにしていますが、まさに適格というほかはありません。彼にはもっとビジネス経験を語ってもらいたかったのですが、残念ながらそれもできないまま亡くなってしまいました。

彼は私にとって、というより、わが研究所の設立と運営にとって、かけがえのない人でした。彼がいなければわが研究を立ち上げることも、運営していくこともできませんでした。私が彼の同期生らと雑談をしているとき、将来はできたらアジアに関する NPO(特定非営利活動)法人を作りたいものだという話をしました。すると、NPO といえども、お金がかかるでしょうから、私が手助けしましょうか、先生はお金儲けが苦手でしょうから、と彼がいつてくれたのです。これは本当にうれしい申し出で、本当ですか、と思わず聞き返したものです。結局、彼の申し出通り、彼の尽力で、一定の資金を集めることができ、NPO 法人を立ち上げることができました。

お世辞でしょうが、いつも先生の言葉を

使いながら、従業員には話をするんですよ、とも言ってくれました。お世辞でもうれしいのですが、いったいどういう話だったのか、私にはあまり自覚がありません。是非彼から直接聞きたかったのですが、それも今はできないのが残念です。

研究所を立ち上げてからの思い出話を1つしましょう。私の研究の目的は、私が長年アジアの研究をし、何十回にもわたるアジア訪問などから得た知識を基に、なんとか EU(欧州同盟)に関する理論的なみかたのようなものを構想したいというのが私の最終の研究目的の1つです。つまり、レベルは低くても、独自のアジア経済論やアジア社会論を構築することが私の夢です。それには東南アジアのどこかの国とか中国や韓国などの単一の国の研究をするだけでは不十分です。EU と違い、アジアには多種多様な人種、言語、宗教・文化、伝統、歴史などがあり、キリスト教文化に匹敵する共通の文化や思想はほとんどありません。要するに、アジアという言葉はあっても、アジアという実体は地理的なもの以外にほとんど存在しないと言っていいでしょう。それではアジアに共通するものは何も存在しないのかと言えば、私はそんなことはないと考えています。それは何でしょうか。

それは私の見方では、日本が明治維新で追求したように、近年のアジアは広義の意味で、ほとんどが西欧化あるいは近代化を追求しているということです。近代化は基本的に経済的には工業化を通じての経済発展、政治的には民主化、そして心理的には

合理主義、などと言えるでしょう。これらのすべてを身に付けようと努力し、かなりの程度それに成功した国はあっても、西欧社会にほぼ近づいたと言える国は、経済ないし量的な面を除けば、今なお部分的には実現したとしても、ほとんど存在しません。ある意味で、それは不可能であると同時に、必ずしも必要ではないのかもしれない。

確かに、経済面、厳密に言えば経済活動の結果である所得水準だけを見ると、アジアの多くの国が欧米水準に追いついたか近づいたと言えるでしょう。もちろん、これだけで西欧に追いついたかといえば、欧米の人たちは決して認めないでしょう。それはアジアが自力で達成したのか、そうではないでしょう、と反論するに決まっています。

まあそれはそれでいいとして、本題に戻りましょう。本題とは、わが研究所の設立の趣旨です。それは、今日、これほどにアジアへの関心が高まった割に、多くの企業が安い労働力を基に利益を追求するためアジアへと進出し、大企業を中心に一部の企業は成功したとしても、多くの中小企業は成功せず、撤退する羽目に陥っているという事実は何を意味するのか、ということです。また最近ではアジアに旅行するという人にも時々遭遇する。そして、アジアは面白いとか、楽しかった、食べ物はうまかった、などという話を時々聞くようになった。こうしたポジティブな話を聞くのはうれしいかぎりです。時にはネガティブといいますが、批判的な話を聞くこともあり、残念に

思います。

まあそれはそれでいいとして、間違った印象や表面的な理解と言いますか、誤解と言いますか、そうした意見を聞くのは批判する人よりもっと残念に思います。なぜなら表面的で生半可な知識はかえって、日本とアジアの関係に悪影響を与える可能性があるからです。たとえば、最近では反中国的・反韓国的な見方が横行しており、それが日中、日韓関係に悪影響を与えています。そのことが安倍内閣の支持率を高め、その結果日中韓の関係改善にマイナスの影響を与えているとすれば、大きな問題です。

むしろ、ことはそれほど単純ではないという意見もあるでしょう。確かに、そこでは様々な要素がからんでいることでしょう。アジアについての意見を聞いていて、気になることの1つは、アジアを自分たちと同じような考え方をする人たちで、自分たちの価値観がそのまま通用すると勘違いしているのではないかということです。かつて、中根千枝さんは、日本人は世界中、自分たちと同じだと考えて行動する人たちだ、といった趣旨のことを書いています。その理由をはっきり書かれていませんが、同質的な日本人社会では、異文化の人たちとの接触機会がほとんど無く、異文化の人たちの思想や行動様式について学ぶ機会はほとんどない事が影響しているのではないかと思います。アジアの大部分の人たちは日本人とまったく異なる植民地経験をした人たちであり、異なる文化を持つ人たちだ、ということに気付かない若者、否、ときには大

人にさえ、お目にかかります。

私自身、欧米ばかりか多くのアジア諸国を訪問して、こうした考えではうまくいかないことを学んできました。井口さんはわたくし以上にこうした経験をし、苦労しながらビジネスをやってきたことでしょう。彼の忙しい生活を見るにつけ、なんとなくそうした心配をしたものです。毎年、何十回となく飛行機に乗り、世界を飛び回ることにはだれにとっても、容易ではなく、また体に響くものでしょう。

このように、一部の日本人はアジアについてあまり正しい知識を持っていないように感じます。そこで、ちょっと、難しいテーマではありますが、できる限りアジアを正しく知ってほしいと考え、井口さんに話すと、それは素晴らしいと賛同してくれました。しかし、我々のやっていることは迂

遠かつ面倒なやり方であり、なかなか理解されないかもしれません。しかし、将来に必ず生きてくると信じてやっております。そうしたやり方を井口さんはそれなりに理解してくれる数少ない一人として、支援してくれました。うれしい限りです。

まあ、ちょっと長くなりましたので、そろそろ結びにしましょう。井口さん、あなたはいまどこにいますか。忙しかったこの世と違い、のんびりと、そして煩わしい仕事から離れて、楽しい日々を送っていることを、心より祈っています。私が井口さんのところに行くのも、遠いことではありません。いつか、どこかで、またいつもあの優しく微笑み、思いやりのあるあなたに、ぜひお会いしたいものです。それまでしばし、気長に待っていてくれるようお願いいたします。

合掌